

イトコー創業五〇周年記念

激動の生涯

「伊藤正雄・努力と運と健康に恵まれた五〇年」

人・地球・笑顔



イトコー50周年

A portrait of an elderly man with grey hair, wearing a dark blue suit, white shirt, and patterned tie. He is looking slightly to the right with a serious expression. The background is dark and out of focus.

不斷の努力

株式会社イトコー代表取締役会長

伊藤正雄

六人兄弟の長男として

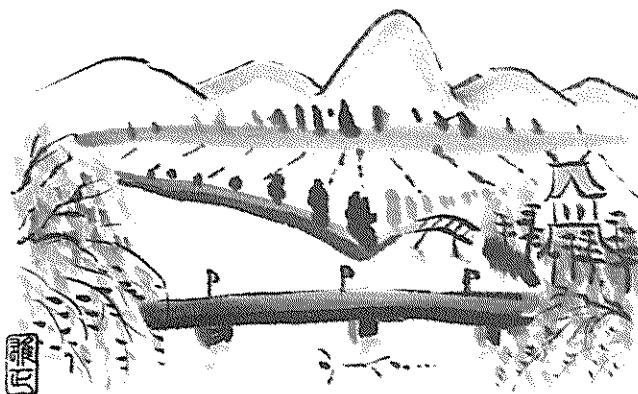
大正・昭和・平成と、ともかく三代に渡って生き抜いて参りました。六人兄弟の長男として豊橋の東八町で生まれ、八町尋常小学校に昭和八年入学しました。勉強が嫌いで明日は試験だと先生に言われても平氣の平座で遊びまわっておりました。

大工の息子で、親からも勉強をしろとは一度も言われなかった氣がする。故に運動神経は抜群でガキ大将でもあった。六年生の時には剣道部の選手と水泳の選手で、水泳は豊川で、夏には雨の日でも泳ぎまくった。その効果があつて小学校の水泳大会でよく優勝をした。得意はクローリングであつた。私の小学校の同級生に現在愛大の学長牧野由朗氏、又、青山建設の社長青山英夫氏、夏目医院の院長夏目繁行氏、又、行政の鈴木、林氏等がいる。一クラス六〇名位で、私の頃は男女別であつた。六年経つて中学へ入る者が二〇名位、あとの四〇名は高等尋常小学校へ、中には義務教育だけで終わる者も三名位はあつた。

豊橋高等小学校へ昭和十四年の春入学して二年間の教育である。親父が大工の職人でおふくろがアメリカの婦人のはき捨ての靴下ほどきで朝から晩までガラガラやつて生活の足しにしていた。私も二年間大阪朝日新聞を朝刊・夕刊各一五〇軒配つて頑張つた。今の上伝馬の所に新聞屋があつて四時に起床して走つて通つた。又、

リヤカーで豊橋駅まで新聞を取りに行くとお金が取れるので其れも引き受けた。自分でもよく働けるものだと感じた。学校で授業中、コックリ、コックリ始めるのでよく先生に注意されたものだ。又、その頃は戦争が激しく、よく新聞社から号外で引つ張りだされた。授業より号外の方が大事ならしい。B四位の号外を抱えるだけ持つて八巻きして腰に鈴を縛りつけ、勢い良く街へ飛びだした。始めは恥ずかしかつたが、馴れてくると大変愉快である。私が「号外、号外」と大声で三〇枚、四〇枚を走りながら空に向かつて投げ上げると、ぱつと広がつて道路に一杯になる。其

れを我先に大男の人達が目の色を変えて拾っている。何とも言えない氣分である。



高等二年の時、男子クラス約四二〇名で一宮の砥鹿神社より舟原町の母校までマラソン競争である。よいどんで一斉に走り出した。私は真ん中へんでペースをくずさずのんびり走り出した。短距離の得意とするものはやつぱり早い。当古橋までは先頭で走っていたが、顔が真っ青になつてへとへとになつていた私が一人抜き、二人抜き

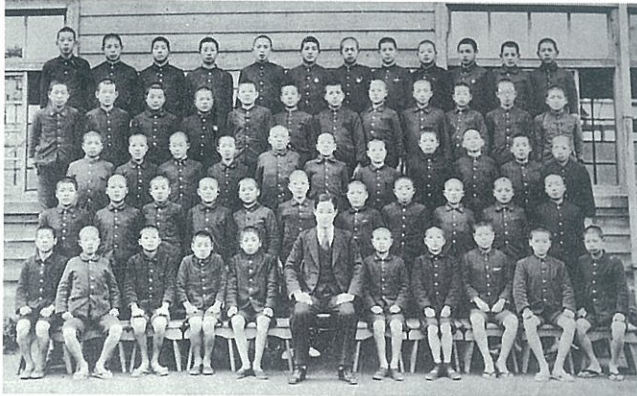
して中には歩いているものもいる。なにくそと頑張つて学校の門をくぐつた時は思いもよらず三位であつた。ガキの時より身体は丈夫であつた。

予科練の試験を受ける

やがて昭和十六年の春、まあまあで卒業ができた。その頃は、戦争の真っ最中で、豊川の海軍工廠か名古屋の岡本航空機工業(株)か迷つたが岡本に決めた。

満州の鉄道“満鉄”へ行く者もあつた。又、中学へ入る者もいた。私の家ではとても中学へ行く身分ではなかつた。四月、名古屋の南区 笠寺町の岡本航空機工業(株)へ養成工として入つた。寄宿舎生活である。全然知らない近郷の者達で、一室に十二名で鮎詰めである。半日は青年学校で工業学校の物理・化学・数学と教練で軍隊の予

●昭和16年高等小学校卒業(最後列左から7番目)



備訓練である。ど長い軍人勅諭を暗記させられた。半日は現場で施盤工として教育を受け、半年後には海軍の零式戦闘機の脚の部分の生産に入った。私は四尺施盤でネジ切りである。青年学校二年生の頃より勉強など大嫌いの自分に欲が出てきた。やつぱり勉強しなければ駄目だ、落ちこぼれになる、よしやるぞ!と。

日曜日は本屋で参考書となるものを買い集めた。十時に消灯ラツパで勉強が出来ないので押し入れに裸電球を引き込み、十二時頃までよく勉強をした。もともと頭が悪いので大変だつた。或る日、本を開いたままに押し入れの中で寝てしまった。ところが、裸電球が布団に触れ、布団が焦げ出した。

誰かが、「火事だ!臭い」と大きな声を出したので、びつくりして飛び起き防火用水ですぐ消したが、舎監に知れひどくしぼられた。

青年学校三年生(十八才)の時、自分の夢であつた海軍の予科練の試験を名古屋の南区の小学校で受けた。試験科目は、算数と国語だけであつた。

軍の司令部から学科試験は合格したから第二試験を呉の大竹海兵団で受けるよう通知があつた。第二試験で受かつた者が正式に海軍飛行予科練習生として採用を受けるのである。三日間、海兵団で海軍の兵隊と同じ生活をした。

まず、身体検査 視力・聴力があり、耳は懐中時計を耳のそばに持つていきカチカチと聞こえたら手を振る。其の距離の遠い程良い。握力・胸囲・体重・肺活量 最後に、床屋の椅子のような物に乗せて十回程早く回転させて止め、椅子から降りて「気をつけ!」の号令

で不動の姿勢をとるのだが、あつちへふらふら こつちへふらふらして五秒以内に完全に不動の姿勢がとれば合格である。学科はまた国語と算数である。これにすべると一般水兵にまわされるのである。その仮入隊中に参つたのが兵舎のトイレの小便場の掃除である。現在のよくな水洗ではなく、仕切り壁はむろん無い。昔の駅の公衆便所の長いと思えばよい。夕食後三十分からトイレ使用禁止で、裸足で麻のロープのほどいた雑巾で小便の流れる所を拭くのである。臭くて足の裏に小便が……。何度か拭いている内にピカピカになる。掃除終わりを告げると当直士官が検査に来る。水が残っておればどやされ、えらい所だと思つてつくづく思う。

豊川で人を助ける

五月中頃に、海軍司令部から本籍地へ採用通知が届く。「やつた」。文面には、貴殿を七月十五日 土浦海軍航空隊へ乙種飛行 予科練習生として入隊を命ず 同日第二鹿屋海軍航空隊へ派遣修行を命ず」ときた。ちよつと面喰らつたが、爆弾を落とす役目と機銃射手と通信兵のことである。初めて親に予科練に受かつたと言つたら、親父がびつくりした顔をしていたが、あきらめたらしい。

だんだん入隊の日が近づいてきた。

七月の始め 久しぶりの日曜日、豊川へえびすきに出掛けた。午後、関屋の貸ボートの処で、海軍工廠の工員の連れの一人がボートに

乗ろうとしてボートとボートの間に転落してしまつた。浮き上がつて来ないと大騒ぎ……。ちよつと私がサッポー(水着)のままだったことと泳ぎには自信があつたので、すぐ飛び込んだ。案の定、大きな木造船(約一〇〇トン位)の船底でもがいているのを見つけ、そのまま助けに行くと私も溺れてしまつたので、一度浮き上がつて「この船の下にいるぞ。その竹竿をくれ!」……片手で竿の端をつかみ片方の手で船底にすずんでいる彼の洋服の袴をつかみ、竿を2回程引くとすーつと皆が引き上げてくれた。本人はぐたーつとしていた。すぐ船上で腹を膝に当て、くの字にして背中を押し付けたら青い水を一杯吐いた。息も活発になつてきた。やれやれ……。連れ達が両脇を支えて何度も礼を言いながら帰つて行つた。

人を助けるという事は本当にいい気持ちだ。

そういえば前の年(昭和十八年の夏)、豊川の本杉の前岸でやはりえびをすいていたら、小学校四年生ぐらゐの男子二人が、浮き沈みしながら下流へ流されているではないか。先に流れている子を助けに行き、水深二・五m位だつたと思うが、手をつかんで岸へと上げようとしたら、私に巻きついて自分が浮き上がろうと必死である。これではこつちが沈んで溺れてしまふぞ……。そこで、私も一緒に潜つた。彼は苦しいので手を離した。今度は後ろにまわり首を抱いて片方の平泳ぎでやつつとのこと岸にたどりついた。

もう一人を見ると釣りをしていた小舟が助けていた。顔が真っ青だつたが、だんだんと正気になつてきた。二人共歩いて帰れると言ふ事、「お兄さん、ありがとう」と言つて、しょんぼりと帰つて行つた思い出もあつた。

鹿屋海軍航空隊へ

別れの挨拶を青年学校と職場と自宅の前と氏神様の前と駅前五回もやらされた。

予科練と聞いてみんなが羨ましがった。本人も意気揚々なものがあつて十八才の若さで、「死んでお国の為に尽くす」なんて立派な事を言い続けたものだ。

町内の国防婦人会の皆さん方に、日の丸の小旗で今の旭町の自宅から駅まで歩いて、「勝つてくるぞと勇ましく……」の軍歌で、親・兄弟・親戚一同に送られて七月十二日正午発の軍用列車で、鹿屋まで三日間の汽車の旅である。実は私と同級生のB子さんが、私の為に千人針を縫ってくれました。その娘は、みんなを送ってくださつた反対側のホームでじつと泣きそうな顔で見送つて下さつたことを覚えております。(あとで話しますが、その娘は自衛隊の偉い人の奥さんになり、いいおばあさんです。)途中、九州の入口で一時間の休憩がありましたので、民家の家のタライで行水させて頂いたり、さつま芋を頂いたりしました。七月十五日九時、第二鹿屋航空隊の兵舎に早速案内され、私服は小包にて自宅へ送り返し、七つボタンの夏服と冬服を頂き、兵籍番号と氏名を墨で書き入れる。靴下・裸し(ふんどし)・皮靴へ大きな名前を書き入れ、ちなみに兵籍番号は(呉志飛二九三三五番)でした。まず、三日間はお客様待遇でしたが、その明るる日が大変、「おまえらは、テレコテレコしよつてまだシャ

バ气が抜けておらん！軍隊とはどういふところか焼きをいれてやる。ひとりづつ前へ出てこい！」教班長に怒鳴られ、軍人精心注入棒と太書きしてあるバッテリー(バット)で、三本ずつおもいつき尻を殴られ、頭の前から星の三つも四つもでた覚えが昨日のようだ……。

—— えらい処に来たもんだ。

—— こんなはずではなかつた。しかし、もう後の祭りだ。

新兵教育三ヶ月で、兵舎を離れたら兵は駆け足で行動をする。午前中は体操で、午後は爆弾投下と機銃と通信の特訓である。体操は棒倒しとか、砂場で空とぶ空中転回である。初めは背中をおもいつきりぶつけて息が止まりそうだった。十回もしたらうまく立てるようになった。平均台も五m位高い所で、片足を上げ両手を広げてゆっくり歩く。風のある時には、ふらふら今にも落ちそうで冷や汗でびっしょり……。又、海軍には遠泳がある。山から来た者で泳げない兵隊もいる。海軍では三日で何とか泳げるようになる。高須の海岸で、舟より物干し竿の先にロープをつけ、三m先に泳げない者の腰に縛り付けて、舟の上より蹴飛ばし海中へ……。ちようど大きな魚を釣つているような格好である。泳げない者は、海水を飲みながら沈まないように手足をバタバタ死に物狂いでもがいて、ほどほど息が切れそうな頃を見計らつて釣り上げては又沈める。その繰り返しで、三日で犬カキでもない平泳ぎでもないが、ともかく沈まなくなる。

—— 人間やればできるものだ。

午後は学科で、機銃射手の勉強である。二〇%機銃の試射の時、機銃に豊川海軍工廠制作と書かれてあり大変懐かしかった。海軍

の零式五二型戦闘機単座で、機銃は翼に二〇〇機銃四門と発動機の横に七・七機銃二門、計六門の機銃が四〇〇m先で一点接合する仕掛けになっている。七・七ペラとペラの間より発射するので、そのペラの芯にカムが付いておりその調整でペラを撃たないようになっている。

待ち望む外出は月に一度である。真っ白い服に七つボタンで、ズボンに折り目が二本ついたり、ヨレヨレだと外出禁止である。前の夜はズボンに霧を吹いてきちんとし、テーブルとテーブルで朝まで寝押しである。そして、外出……。

鹿屋の街を颯爽と歩いていると若い娘達が、「あつ、予科練だ！ かつこいいい」と近づいてきてニヤニヤ……。何とも言えない気持ちである。

ある日曜日、私達の班で、一人時間に遅れたのがいて、その為に全員罰直でバッテリーを三本喰う。この頃は、バッテリーにもだいたい馴れてきた。「桃栗三年柿八年」と書いたのやら「味の素」もあった。本人には可愛そうな仕打ちである。両手を釣床のかんでぶらさげて野球のバッテリーの二倍位で思いきり殴られる。ブランコのように戻ってくるところを十五発やられたのだからたまらない。気絶してしまった。

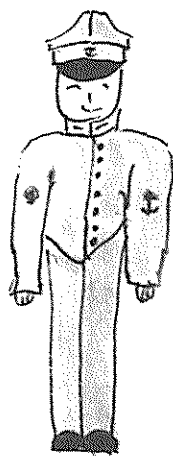
見ている者達に上官が、「何をぼやっとしているか！ 水をかけろ！」水をかけられてやつと気がつく。一人では立てないし歩けないので、同年兵が交替で尻をタオルで冷やす。全くの地獄である。

先輩達が特攻隊で出撃

やがて三ヶ月が過ぎ、実習部隊へ配属となる。おかげで私は三重の鈴鹿海軍航空隊（二〇〇一空）雁部隊である。

二十年の春まだ浅き三月、今度は名古屋海軍航空隊へ転勤である。今の豊田市である。だんだん郷里に近くなるので、内心喜んでいたので、その航空隊に敵のグラマン艦上戦闘機の空襲が度々あった。

飛行場と松林の間で二〇〇機銃で広戦するのだが、敵機が兵舎を低空で爆弾を落としていく。二〇キロ爆弾で落下傘（らつかさん）がついている。あまり低空なので自分の爆弾で機がふつとぶから

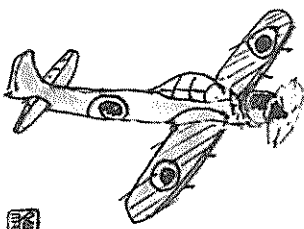


である。遠くから私が、機銃

を敵機目がけて撃ちまくるとグラマンが、急旋回して私の方へ突っ込んで機銃掃射である。真

正面からくるのを、撃ち込むのが一番よいのがなかなか命申しない。”

この野郎”と頑張ったが、南の空へ消えて行った。ふと我に返ると同年兵が血だらけで倒れていた。名譽の戦死である。何とも言えない気持ちになった。私だけ生きて彼に申し訳なかった。



春も終わり五月早々に、先輩が特攻隊で出陣することになった。二〇、二一才の若さで——、前の晩は無礼講である。手紙を書く者、酒をメチャクチャに飲み大声を上げる者、外出して気をまぎらす者、その心境たるもの明日はわが身はないのである。沖繩に集中した敵艦隊に突入して自爆をするのである。敵艦にあたるのはまれである。大方は近くの海に雨あられの機銃掃射に、又、海へ突入か、人間爆弾である。先輩は朝には時間通り一人も遅刻する者もなく、飛行服に白マフラーを首に巻き飛行帽に草薙隊の文字の八巻きをし、軍刀を片手に各自の戦闘機に飛び乗って夜明けきらぬ間に、三十機の特攻隊は南の空へ帽子を振り振り送り出す。私達も同じ運命が待っているかと覚悟するものだった。

あの八月十五日が終戦である。誰もが信じなかった。上官達が本土決戦に備えて死んで戦うと目の色を変えて、私も勿論その気だったが、一日、二日立ち、だんだんと落ち着いてきた。毎日のように空襲があつたのにバツタリと止んで静かである。

隊長が涙声でみんなを悟した。武装解除である。戦闘機を飛行場に並べてプロペラを外し機の前に、又、機銃を外してこれも機の前に整然と……。

焼け野原のふるさとへ帰る

八月二十日頃だったが、グラマンが一機低空飛行で、武装解除の

状態を映して行つた。十月の始め頃まで、私は故郷がすぐ近くなので、残務整理にまわされた。名鉄にて豊橋へ米や軍服を背負つて豊橋駅に着いた時にはびつくりした。焼け野原である。

電車道をとぼとぼと我が家に着いたら何もない焼け瓦の中に井戸の竹輪の部分だけがぼつかりとあるのみ。その横の木の立て札に「家族全員無事 石巻に在住 伊藤三千三」とある。元気をだして一里あるおふくろの在所へ——。

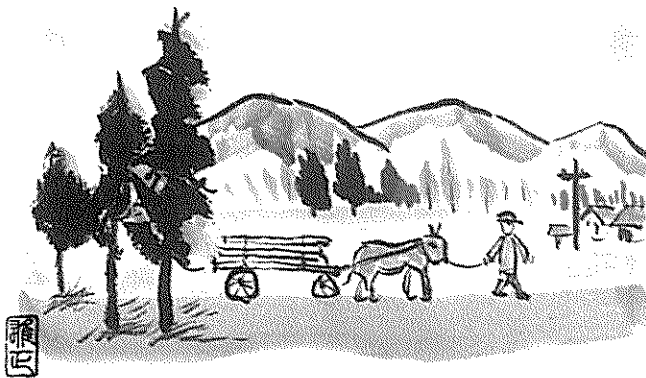
みんなが喜んでくれた。大変懐かしかった。妹が一人、弟が四人、親父におふくろで鶏舎の跡にむしるが敷いてあつた。情け無い飯

住居である。焼け出されてこれも仕方がないことだ。毎日毎日かぼちゃや芋や小麦のただんこ汁で過ごす。大工の父は毎日豊橋方面へ仕事に通つていた。

「さて、なにをやるうか」朝になると歩いて豊橋の駅前へぶらぶらと出掛けて行つた。同級生の家や知つている家へ仕事の件で尋ねた。

そして一ヶ月程が空白のまま過ぎてしまった。

同級生の紹介で豊橋市の復興作業とかで今の上伝馬町の坂



とか吉田城のお堀の埋立てに、焼け瓦を馬車に積んで運ぶ土方仕事である。これも食う為にはやむをえん。三ヶ月程続いたがやめた。

親父が、大工になつて手に職をとしきりにすすめるが、親父といつしよに仕事することが照れ臭くて断る。ちよど叔父が石巻の近くの松山の立木の松を買つてそれを豊橋の芋あめ屋に売つて商売をしていたので、「正雄ならできるとやつてみないか」と言われ、「面白そうだ。よし、引き受けた」

まず、牛小屋より朝鮮牛を引きつり出して台車に――。叔父の台車は金がないのか、輪が四本共金の輪である。ブレーキは一人前についているが手動で危険窮まり無い。

朝は空車なので台車に乗つてたずなを振り振り「チョウ　チョウ　チョウ」右、「ボウ　ボウ」左と言いながら、鼻歌で山に着く。「さあ、作業開始だ」まず牛に「くら」を付け、細い山道を五〇〇m位より松の末口一五〇×二〇〇長　三・六m位、三本位をカンと称するくさびを打ち込んで、それを牛に引かせて山道を下る。人間と牛との呼吸が合わないとなかなか引こうとはしない。汗だくである。牛に足を踏まれることも度々あつた。三十本位集めると昼である。まず、牛にかいばと水とかきあわせて食べさせ、私も芋の入った昼飯におかずが梅干しとしようがと煮干しである。さて、松丸太を台車に一人で積むのである。これが難しい。勿論牛を使つての作業である。現在のフォークリフトの役目を人間と牛とロープであるのである。冬の日は落ちるのも早い。帰路に着く頃には、あたり薄暗く夜風が冷たい。こんなことも一年位は続いた。――やればできると思つた。

買出しを始める

昭和二三年の二月頃、親爺の在所（八名郡舟着村乗本）の古家を解体して、（中二階延べ二〇坪）現在の旭町へ運んだ。あの頃はトラックが木炭車で、運転手が登り坂に来ると、今にも止まりそうになる。「荷物重いのでこの坂登れないかもわからん」。運転手の作戦である。親爺が、ガマ口から何等かを紙に包んで渡して「頼む、頼む、頼む。」と言つたら、ぐいぐいと登り始めた。抜け目のないトラック屋だと思つた。さて、親爺が大工だったので、この年の暮れには引越ができた。その頃はえらく立派な家に見えた。基礎はなく豊川で拾つてきた石の上に建てた古家である。釘はないので古釘を金槌で一本一本伸ばして使用した。鶏舎とはお間違いである。やつと人間らしくなつた。

またまた親父に大工になれとせがまれるが返事をしない。そこで闇屋なるものを始めた。「資本金はないので、さし当たつてさつま芋を一貫目三〇円で仕入れ、二〇貫を南京袋に入れて大阪へ運ぶ闇屋である。三〇円が大阪では一〇〇円になった。これを毎日のように連れと運んだ。汽車賃を引いても七〇〇円は儲かった。その頃の大工の日当が二〇〇円位だつたと思ふ。鼻高々だつた。親爺に「しにかだ。」と言つたら「そんなことは何時までも続くものではない。」と、怒られた。よく豊橋駅にはお髭の佐藤ポリさんが見張つていた。闇屋の取締りである。その日はあきらめた。

豊橋をうまく乗つても大阪で一斉に捕まつたことが一度あつた。

大阪駅の駅前(城東署)の二階へ三〇人位、それこそ芋づるである。闇物資統制違反とかで、芋は④で買い上げてくれるのだが、住所、氏名、捺印を書かされるので、これはまずいと思ひ、係のお巡りさんに「小便所はどこですか?」と尋ねたら「階段降りて突き当たりだ。」と言つたので、「ちよつと行つてきます。」と言つて、どうどうと階段を降りて玄関を出て、駅に走り込み、豊橋へ南京袋と芋代と汽車賃が損したこともあつた。

芋から今度は米に変わった。田舎の農家へ買い出しに行く、たしいがおばあさんがいて、その頃は一升マスで売買した。買う時には一升マスの上を丸い棒で、余分な米をかき落して一升だが、軽くかき落すコツで十升で一合位浮かす。売る時には逆で、力を入れて棒が曲がるかと思ふくらいでかき落す。いやな商売である。芋、するめ、卵、れんこんまで運んだ。何でも高く売れたものだ。大阪からは、石鹼、タイヤ、長靴など買つてきて、豊橋の闇市に卸した。石鹼などは羊羹位が五日も経てばキャラメル位にやせた。

また、タイヤはスツクが一重張りで、荷を積むと一週間でパンク、使い物にならない。

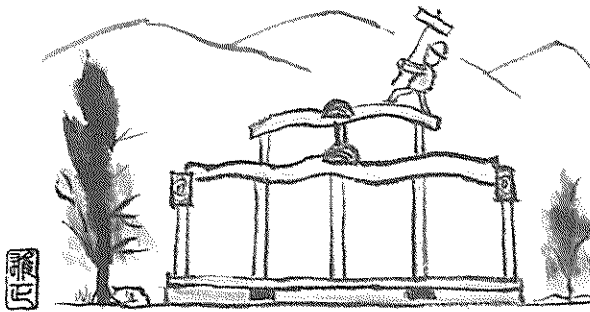
親爺の大工見習いに

やがて昭和二四年の春、私が二三才の時に、闇屋も儲からなくなり、

勤めに行くのも思うように仕事がないので、そこで親爺の大工見習いをやることに決めた。果たして大工を覚えるだろうか? 歳が過ぎて今更大工とは悩んだが、決めた以上は頑張るしかない。「よし、やるぞ。」心機一変、大工の小僧は、まず穴掘りからだつた。柱に抜穴と言つて柱の中央に一〇・五cm、巾二cm、一二cmを貫通させるのを、玄能でのみの頭を思い切りたたくのだが、命中が悪く手をたたき、血豆はできるし、股にはのみをくすげるし、とにかく生傷は絶えない。私より先に大工の小僧になつた若い年で、私より早く正確に穴を開けたのには参つた。一年が過ぎてまだまだ何にもできない。鉋の刃もろくにとげない。しかし高いところへ上がることは予科練時代に鍛えてあるので、建前とか屋根の作業は重宝がられた。ノーパンの自転車に道具箱を積んで、渥美半島の福江、堀切、中山と親爺の大工仲間の下地の荒木さんの出生地を大工五く六人で隣から隣の家へと居宅か長屋(作業所兼居候の室)を順番に建て廻つた。勿論泊まり込み。夏は午前四時三〇分に起こされ、朝飯前に一働き、六時ごろ朝食で飯の美味しいこと、銀飯であさりの味噌汁、生卵付きである。二四才の若さで良く腹が減るので、田舎茶碗で五杯は食べた。普通に食べたなら入らないので、汁をぶっかける。よく喰つたものだと思つても感心する。骨休み時間には道具を砥いたり、鉋の台直しをしたり、それが小僧の仕事だつた。晩の八時頃まで仕事をした。二倍の労働力である。常雇であるので、施主は喜んでくれる。だから次から次へと仕事が廻ってくる。親父や先輩の方に教えて頂く。こつちも早く一人前になりたい一心で、勉強もした。洗濯もズボンの破れも自分でした。予科練時代が懐

かしい。晩にはどぶろくか焼酎が毎晩でた。その点は豪勢である。二六年頃は今度は豊橋の神野新田の五郷へ。やはり海辺で、渥美と同じ様に居宅や長屋を次から次へと建てた。ここは米と海苔で、どこの家も金が喰つていた。だから「おらがの家は大工の人工が何百工かかった。」と人工が多い程自慢していた。

花井さんの居宅のとき、徳太郎さん(施主)が、私がよく働くのが気に入られたのか、「この村で気に入った娘がいたら、俺が必ず嫁にもらつてやるからな」と言われ、ちやうど親爺が聞いていて、後で「海辺だと付き合いがはでだから、山の方からでない」と駄目だぞ。」と言われ、なるほど貧乏家では、そこまで氣を利かせないと恋愛もできない。これは冗談だが、その当時の五郷の大農家の娘さん達は、かすりの着物でモンペ姿で手拭を姉さんかぶりで手甲までして、たすきがけで、米俵一表五〇kg位を、ひょいと軽い気持ちで背おつて牛車に積落している。よく働いた娘さん達だった。



見合いをする

月日も流れて二六才の正月だった。豊橋の多米の仕事で長屋を改造して、お世話になった中神さん(豊橋の中神建設社長のお父さん)から、「この村に良い娘がいる。見合してはどうか。」と言われて、親爺も見合いをしたらと言いつて、てれくさかったが、自転車によれよの普広に親爺の南京袋で作ったようなオーバーを借りて、乗り込んだ。先方さんは男親が渥美運輸の庶務課長で、母親が農業をしていて、女二人、男四人、その長女との見合いである。その親爺は話が好きで、一人で世間話を喋りまくっている。私は、職人で無口で「そうですね。そうですね。」と相槌を打っていたが、なかなか相手が出てこない。そのうちお盆にお茶が二つ出た。何も言わずに頭を下げて、うつむいたまま奥へ入ってしまった。小柄でぼちゃぼちゃとしていたが、良く分らない。これでは見合いにならないと思い、仲人に仲人の家で二人で話をしたいので、呼んできてもらった。「趣味は何ですか。」「今、何をしていますか。」「色々聞き出すが、顔を上げず下ばかり向いている。大変恥ずかしがりやだと思った。

その年の春、また五郷で仕事をしていたら、仲人から先方は大変気に入ったとのこと、良い返事を待っているとのこと。、仕事に夢中でつい伸び伸びになってしまつて、あれから他に見合いをしようと思つてはいたのだが、もう顔もはつきりわからなくなつてた。私のほうも第三人で誰も片付いていない。それに両親もいる。それを承知で嫁にきてくれるとは有難いことだと感謝して、チャンス逃がしてはと思ひ、親と相談して仲人に返事をした。後で分かったのだが、妻の方は私で三回目のお見合いだと言つた。こっちは初め

てだった。どこが良かったかと聞いたたら、髪がぼさぼさで飾り気のない丈夫な男らしい方だといっておった。

結婚、そして父の

二七年の十月十日、自宅で結婚式をあげた。金もなければ物もないときで、配給の酒一升と闇のどぶろくで、仲人、親戚の人達と細やかな式だった。ある叔父が「お魚これに。」と大きな声でするめの切ったのを箸に挟んで、目の高さまで上げて、何度も言っていて、皆がそれを見ながら酒を飲むものだった。新婚旅行もなく、次の日は氏神様(東田神明宮)へ二人でお参りに行き、松竹館で映画を見て、うどん屋でてんぷらうどんを食べて、新婚旅行は終わりである。次の日は仕事である。自転車に弁当箱を縛り付け、近くの材木屋へ、妻は朝早くから井戸水を汲んで、たらいで弟たちの洗濯物やつくろいで大変であった。二九年の五月一日に今の専務の正幸の誕生である。親爺もお袋も男の子だったので、大変喜んでくれた。いよいよ子供の親となり、責任重大である。仕事に益々拍車がかかる。休みは職人休日というやつで、毎月一日、十五日であるが、月三五日働いたものだ。建て前の日に間に合わないとなると、五日位前から残業、残業と十一時頃まで頑張ったものだ。酒を用意して、飲みながら仕事をした。不思議と馬鹿力が出る。能率も上がった。三〇年の四月二二日に大黒柱の父を病気でなくした。

五七才であった。私が二九才のときである一ヶ月前には体の調子が悪いとそれこそ年中無休の親爺が桜が丘市民病院で見えたら、「直ぐ入院せよ。」と言われて、「少し悪いだけで直ぐ入院とはやぶ医者め。」と怒って帰ってきた。それでも十五日前まで何とか仕事をして頑張っていたが、ついに床に伏して十日頃に佐野病院に入院、お袋が付き添っていたが、前田町の日比さんの居宅の造作中に佐野病院より、「危篤だから直ぐ来て。」とお袋よりの電話で、まさかと思つて自転車で突つ走る。医者と看護婦が横に立っていた。お袋が今にも泣きそうな顔をしていた。私が親爺の手を握り「しっかりして。」と言ったら父が苦しい息遣いの中、細目を開けて「正雄：正雄：後を：」聞き取れない声で息を引き取った。涙が後から後から後から込み上げて父の胸に……。

大工そして一人前

弟二人は豊橋商業在学中で、その下が小学生で、私の長男と妻とお袋。長男の私に大きな負担が押し寄せた。さあ大変、どうすべきか。私もやつと大工として一人前だった。ここで弟たちに「学校やめてしまえ。」と言いたいところだが、それでは兄



貴の貫禄まるつぶれである。成せばなる何ことも成さぬは成せぬ人の成さぬなりけり、昔の人の格言を思いだし、また予科練の土根性の発揮はこの時と、一宮の職業訓練所へ行き、先生に大工の見習いを泊まり込みで二、三人お願いした。運よく初めに国府町の大林義男君が三二年に来てくれた。そして三四年には現在の係長北尾君が、三五年には現在の佐野常務が見習生として、その頃私は中古のライラック二〇〇ccのオートバイで、見習生は自転車を追っ掛けてきた。段々請負業を手掛けるようになった。私は図面、木出し、各職の見積り、契約書、請求書、雑役と大変である。見習生の指導ができなくなった。丁度その頃腕のいい職人の富安さんに来て頂いたので、いよいよ鬼に金棒となつてきた。見習生を豊橋の大工組合の夜間学校に通わせた。ある時は望月工務店の現在の社長・望月親さんと組んで、市営住宅の手間受けて、植田、金田と岡崎の美合の分譲住宅四七戸を自竜組より手間受で頑張った。

また、御油の星野工務店の先代の星野行次郎社長より安城、豊川の市営住宅を数多く手間受をしたものだ。また、民間の住宅を総請負して実績を上げてきた。小さい土地も手に入るようになった。

手形にとまどろ

その頃は税務署に節税の意味で、作業所を持たない。トラックはトヨエースの古で、常に地下足袋をはき、乗用車は絶対に乗らない。常々

質素で目立たないよう努力したものだ。

三六年春、御油の中野大工さんの紹介で旭可鍛鉄が名古屋の双和工務店で建設中であつたので、現場事務所に行き、「大工五人がいるが使ってくれ。」と世話役に頼み、じろじろと見ていたが、名義人に話しOKとなつた。すぐに飯場（作業所の仮住い）七〇坪を五日間で作つた。カード室、守衛室、食堂と次々と大工の仕事を請負つた。

やがて三七年の旭可鍛鉄が完成すると双和は名古屋へ引揚げた。双和の許可を願い、旭のM課長に次々と仕事を頂く。又、その頃O課長に見込まれ、大きな仕事を請負つた。仕事も順調に終り、三〇〇万位の手形を頂いた。生まれて始めて見る大きな紙に金額が記入されて、四ヶ月後には現金になること。さあ大変、郵便局しか知らない私にこんな手形を頂いてもどうしようもない。Mさんに話すわけにもいかず、困つてしま

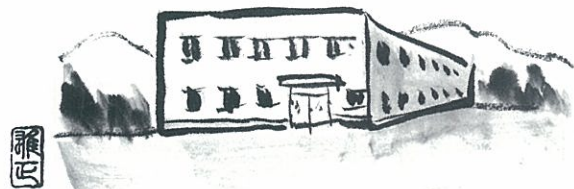


つた。よし石原産業に訳を話してお釣を戴こうと石原産業石原康弘（現在社長）さんにお願したら、「銀行で割つては。」と言われ、取引が全然ないと言つたら、「困つた人だ。弱つたな。」暫く考えていたが、「よし、伊藤さんも困るし、伊藤さんなら信用があるからお釣を出そう。」と言つて下さつて、現金二五〇万位だったか、本当に助かりました。そんな訳で今でも大取引をさせて頂いております。

豊川で工務店を創業

豊川の大きな会社へ段々と営繕に入らせて頂くようになり、石巻の作業所より豊川の諏訪の寺部正さん、旭可鍛鉄で知り合いになった方の土地を借用し、電柱の仮設の作業所を建てさせて頂いた。約三〇〇坪だった。それからは毎日のように豊川へ通った。もともと豊川は、親爺が海軍工廠の建設で、朝暗いうちから頑張った土地で、私も豊橋より豊川がこれからは伸びると思いい、志を全面的に豊川に集中した。中古マイクロバス十人乗りを求めて、石巻方面の左官の飯田さん兄弟、久米さん夫婦、吉田さん、酒井さん、高橋さんを廻り、豊川へ毎日送り迎えをした。四〇年頃土木の落合組落合昭治社長（旭で知り合った親友）が、私の所を借り受けて、私は現在の熊谷組の横を約三〇〇坪借り受け、作業所を電柱の生柱で、また小さな事務所を建てさせて頂く。その頃仕事は大変多忙で人手が不足をしていた。事務二人、大工五人、その他七人、あとは外注で頑張った。

四五年青色申告で来ていたが、待望の四五年七月一日（株）伊藤工務店を創立した。社長と言われるようになって、くすぐったい感じ



だった。大工の職人がいよいよ社長になったのである。社員も順調が増えてきて、十五名位になる。四九年頃石油ショックでえらいことになった。セメントはない、トタンはない、釘はない、紙もない、あらゆるものが欠乏である。闇で買入れて大損害を被った。完全なる赤字決算である。銀行の借金がどんどん増えていく。自分なりの全財産を金で計算して、借金との釣合を計算してみる。完全の赤字である。顔色が変わった。いやな気がするが何とかしなければ、直ぐに外に洩れて仕事に大影響する。もともと人間生まれたときは、裸じやないかと開き直るが自分だけならともかく、社員の皆さん、また家族の皆さんにえらく迷惑をかけることになる。毎日毎晩いかにして切り抜けるか思案にくれた。

母、そして妻の死

一年、二年、三年と段々とトンネルの彼方に光明が出てきた。社員一帯となって頑張った。その賜物である。本当に有難いことだ。



五三年三月一日、息子が金沢工業大学建築科を卒業して、浜松のA建設会社へ三年間の修行に出したが、二年後に呼び寄せて、専務としての役付きで、親子ともども会社の発展に頑張る。

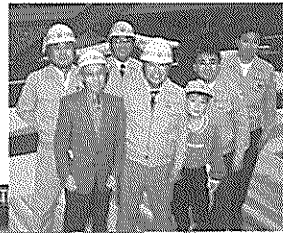
五六年十二月一日、交通事故がもとで、元気なお袋が七七才で亡くなった。そして私の妻が五九年十一月二七日、豊橋市民病院で、最後は肺がんで去った。三年間、入退院を繰返して、癌には勝てなかった。朝晩必ず病院へ。家政婦が室の外で「気の毒だけど段々弱ってきた。一ヶ月持つか判からん」と。痩せて股が腕ぐらいに、食べる物は皆吐いてしまう。ふと昔を振り返る。水道もなく井戸のポンプで水を汲んでたらいでの洗濯、多いときには弁当を十一個も作ってくれた。弟達の面倒も良く見てくれた。五三才の若さで。本当に残念である。三二年間何もしてやれなかった。これから二人で大いに旅行に行こうと語り合った。娘の正代、隣の榎島さん夫婦と娘さんと山口県の萩へ、また北海道へ村松工務店の夫婦四人と又九州へ旅行する矢先、癌の宣告を受けた。



十一月二三日孫の加葉子が生まれた。十一月二四日病院のビデオで元気な生まれたばかりの孫娘を見て手を叩いて喜び、「でかした。でかした。もし良かったら加葉子と名を付けて。」と突然言われてびっくりした。そして四日目の夜、家族を呼びつけて「皆んな大

変お世話になった。お父さん長い間有難うございました。良いお父さんでした。今度生まれ直して父さんのところに来ます。」娘には「お母さんが居なくても寂しがらずに、姑さんに良く仕えるんだよ。」皆に言い聞かせ、家族皆大泣きをしていた。翌朝七時十九分(十一月二七日)家族の見守る中、足から段々と冷たくなって、この世を去った。

やがて光陰矢の如し。忙しい忙しいと言っているうちに平成三年二期も無事に過ぎ、年間十六億と毎年売上を全社員三二名の努力で達した。念願の新社屋も必ずや来年早々には完成の運びとなった。全社員一丸となって、信用と誇りの持てる建築物を作り、社会に貢献し、正義と友愛を貫き、豊かで生き甲斐ある人間社会を作ること念願とする。



平成三年六月一日

●平成4年4月 新社屋完成

